



大阪+知的障害+地域+おもろい=創造

知の知の知の知

社会福祉法人大阪手をつなぐ育成会 社会政策研究所情報誌通算 3952 号 2017.10.12 発行

くらしナビ・ライフスタイル ほめ上手、親も訓練

毎日新聞 2017 年 10 月 12 日

叱られた場合とほめられた場合の受け止め方の違いについて説明するペアレントトレーニングの講師=東京都目黒区で



子供の「困った行動」を注意し続けても効果がなく、親も叱る自分が嫌になってしまうことがある。どんなふうに声をかけると、親も子も楽なのか。具体的な対処方法を学ぶ「ペアレントトレーニング」(ペアトレ)を体験した。

●困る行動を仕分け

ペアトレは発達障害がある子の親を支援するため、1970年代に米国で開発された。日本にもいくつかの方式

があり、今回体験したのは発達支援の教室を手がけるLITALICO(リタリコ、東京都目黒区)のプログラム。鳥取大学大学院の井上雅彦教授が監修した。障害の有無にかかわらず親の「困りごと」に対応する内容で、昨年度には約1500人が受講したという。

体験したのは基本編(60分×6回)の初回。初対面の母親3人とグループで受けた。通常は6回とも原則同じメンバーで続けていく。この日はまず、子供の増やしたい行動や困った行動を書き出した。記者は長男(3)について「歯磨きがスムーズにできない」と書いた。それぞれ困りごとを発表していくと、講師の井田美沙子さんが必ず「それで何か弊害がありますか」と聞く。よく考えてみると、本当に困るべきことは少しだと気付かされる一言だ。

●ハードルを下げる

初回のテーマは「ほめ上手になろう」。叱ることで望ましい行動を取らせる手もあるが、結果的に親を避けたり、親がいない場所では良い行動を取らなくなったりする。一方、ほめると子供が自信や意欲を持って次の行動に取り組めるようになり、親子関係も良くなる。自己肯定感も高まる。井田さんは「楽しく子育てできることを目指しましょう」と説明する。「ほめるところがない」と悩む親もいるが、ほめる行為はある種の技術に近い。その年齢でできるとされていることは、全ての子に当てはまるわけではない。「その子」の個性をよく見て、(1)ハードルを下げてほめる(2)努力をほめる(3)困った行動をしていないことをほめる—の三つを意識する。

例えば歯磨き。一連の動作を、遊びをやめる→洗面所に来る→歯磨きを始める—などの段階に分け、その子なりに頑張れたステップまでをほめる。我が子の場合、「歯磨きよ」と声をかけてすぐ返事ができた日に「お、今日いい返事」とほめると、その後がスムーズになった。

効果的にほめるコツは(1)良い行動をしたすぐ後に(2)分かりやすい言葉や表現を

使う(3) 子供に合ったほめ方をするーの三つ。子供扱いされたくなくて、ほめると機嫌を損ねるタイプには「もう歯磨きしているんだね」とできた行動を認めるだけでいい。くすぐりやハイタッチなどの触れ合い、感謝の言葉なども、ほめ言葉の代わりになる。

記者も家庭で実践した。うまくいかない日もあったが、「今日はほめてないな」と自分を客観視できるようになった。約1カ月半後、2回目の体験講座で井田さんに報告すると「頑張りましたね」とほめられ、親もハードルを下げて少しずつ実践できればいいと励まされた。さまざまな声かけの実例やコツを聞いた後に実践と振り返りを繰り返し、他の親とも共有するー。孤立しがちな子育て中の親に、心強い支援だと感じた。

基本編はこの後、子供が自分でやれる環境を作る「整え上手」と、声かけの仕方を学ぶ「伝え上手」が続く。応用編(60分×3回)と思春期編(90分×5回)もある。

●否定的な言葉封印

「子育てはそんなに大変じゃないと思えるようになった」。東京都中野区の50代の母親は、注意すると「消えろ!」と怒鳴りながら物を投げるようになった高校生の長女(17)に悩んで思春期編を受講した。長女は広汎(こうはん)性発達障害とされていて、行動がゆっくりでこだわりが強い。母親はいつも、「早くしなさい」と口出ししてきた。初回テーマの「聴き上手になろう」を受けてすぐ、「私がやっていたことは全て逆だった」と気付いたという。

受講後は、否定的な言葉は封印して極力黙ろうと意識し、長女が話す時は「そうだね」と共感した。ほめ言葉を嫌うので、片付けをしたら「ありがとう」と伝えた。長女の態度はみるみる変わり暴力も暴言もやんだ。買い物に付き合うと、初めて感謝もされた。母親は「親の思いばかり押しつけていた。もっと早く受講したかった」と話す。

ペアトレは、発達障害にかかわる医療機関や市区町村の保健センター、発達障害者支援センター、NPO法人、民間企業などが実施している。発達障害のある子を持つ親を対象を絞ることが多いが、リタリコのように誰でも受講可能な場合もある。対象や方式、受講料はそれぞれ異なるので、事前に問い合わせた方がいい。

厚生労働省が2015年に1853市区町村を対象に実施したアンケートでは、回答した503市区町村(回収率27.15%)のうちペアトレを実施しているのは約2割だった。普及に向けては、実施に必要な人材の育成が課題とされている。【稲田佳代】

ヘッドホンを外せない子どもたち

NHKニュース 2017年10月12日

電車の中にヘッドホンをつけている幼い男の子と母親がいました。周りの人が「ヘッドホンで音楽聴かせるなんて!会話しなさい」と母親に言いました。しかし男の子は音楽を聴いていませんでした。逆に音が聞こえると耐えられなくなることがあるためできるだけ音を断っていたのです。男の子はまだ知る人の少ない、だから誤解されることの多い「聴覚過敏」でした。(ネットワーク報道部記者 大窪奈緒子)

インターネットのツイッター。あるつぶやきが話題になりました。幼い男の子の母親からの投稿。



「電車で“小さい子にヘッドホンで音楽聴かせて!会話しなさい”と勘違いされた」

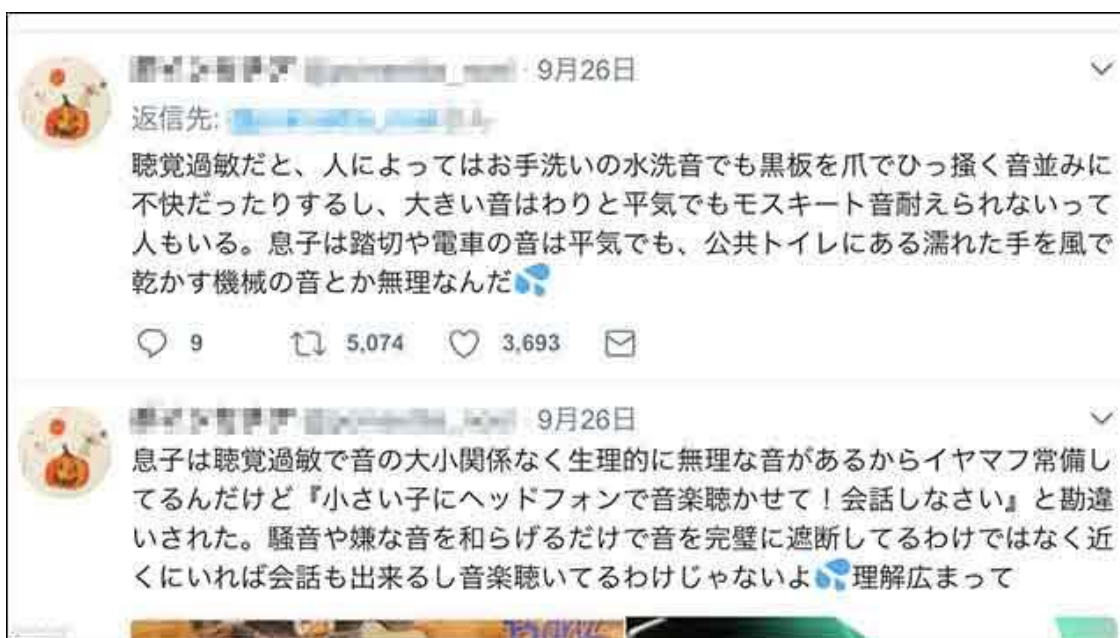
「騒音や嫌な音を和らげるだけ。音を完璧に遮断しているわけではないのに」

「息子は“聴覚過敏”。音の大小関係なく生理的に無理な音がある」

「理解広まって」

ツイッターによると男の子は自閉症スペクトラム障害。発達障害の一つです。他

人の感情を理解したりコミュニケーションを取ったりするのが苦手という特徴があります。こうした自閉症の人に音に敏感な「聴覚過敏」の症状が出る人が多いのです。
「うちの子も聴覚過敏。特にダメなのが大勢の人が集まるガヤガヤした所の音」
「うちも自閉症で、聞くとパニックになる音がいくつかある」
投稿されてすぐに当事者たちの声が次々と寄せられました。



うちの子もそう…

インターネットのツイッター。あるつぶやきが話題になりました。幼い男の子の母親からの投稿。

「電車で“小さい子にヘッドホンで音楽聴かせて！会話しなさい”と勘違いされた」

「騒音や嫌な音を和らげるだけ。音を完璧に遮断しているわけではないのに」

「息子は“聴覚過敏”。音の大小関係なく生理的に無理な音がある」

「理解広まって」

ツイッターによると男の子は自閉症スペクトラム障害。発達障害の一つです。他人の感情を理解したりコミュニケーションを取ったりするのが苦手という特徴があります。こうした自閉症の人に音に敏感な「聴覚過敏」の症状が出る人が多いのです。

「うちの子も聴覚過敏。特にダメなのが大勢の人が集まるガヤガヤした所の音」

「うちも自閉症で、聞くとパニックになる音がいくつかある」

投稿されてすぐに当事者たちの声が次々と寄せられました。



ヘッドホンではなかった

この男の子がつけていたもの、実はヘッドホンではありませんでした。同じような形をした“イヤーマフ”と呼ばれる商品。

両耳を覆うカップに音を吸収する素材が入っていて、密閉して聴覚を保護します。ジェット機の音や、カーレースの際の音などを和らげようと、現場で働く人たちの耳を守るためなどに作られた商品でした。

イヤーマフを国内外で販売している「スリーエムジャパン」の担当者に話を聞くと、ワイヤレスヘッドホンの普及で見分けがつきにくくなっているそうです。そして最近、本やインターネットで聴覚過敏の対策グッズとして紹介されることが増え、利用の幅が広がっているということでした。

痛みや吐き気も

聴覚過敏の人は音に敏感過ぎるため、ふだんの生活の中で音に苦しみます。

「一般には苦にならない音が耐えられないほど大きく感じてしまう」

「意識しないと聞き取れないような雑音や話し声なども聞き取ってしまう」

「そうした症状によってひどい時には痛みや吐き気をもよおす」

聴覚障害学が専門で聴覚過敏に詳しい横浜国立大学の中川辰雄教授に聞くと、明確な治療法は確立されてなく、予測される患者数もわからないそうです。



ただ調査をすると、耳の構造自体には問題がないものの、やはり自閉症など発達障害の子どもに症状を訴えるケースが目立ちました。

調査したのは7年前。ある特別支援学校でおよそ80の家庭を調べたところ、小学部の子どものおよそ半数に聴覚過敏の症状がありました。

ところが、中学部になると20%弱、高等部ではさらに下がって17%ほど。学年があがるにつれ、症状が消えていく傾向がうかがえました。

また、苦手な音はトイレのハンドドライヤー・掃除機・赤ちゃんの泣き声・救急車のサイレン・館内放送などさまざまでした。

中川教授は「聴覚過敏は、子どもの成長に伴って音を聞くという経験を繰り返



し、どういう時に苦手な音が鳴るのかなどを一つ一つ学習することで症状がなくなったりするのではないか。安易にイヤーマフを使い学習の機会が奪われてしまわないよう大人が注意することが必要だ」と指摘しています。

その一方で「聴覚過敏が治らない子どもや、悪化してしまう子どもも一定数いる。イヤーマフをつけることで嫌な音が緩和され安心感が得られ、外に出られるようになるというメリットもある。状況に合わせて使ってほしい」とも話していました。

音に支配されて

聴覚過敏のつらさを教えてくれた人がいました。自閉症で聴覚過敏のある、16歳の大貫智哉くんです。

イヤーマフと録音機能のついたデジタルオーディオを常に持ち歩いています。智哉くんは言葉を発したり、気持ちを伝えたりすることが得意ではなく、母親の敦子さんが、智哉くんが幼い頃からの経験を話してくれました。



智哉くんは幼い頃から音に敏感で、歩き始めるようになってからも音を怖がって外を歩きたがらなかったそうです。そして大きな音が怖いのに加え、たくさんの方がいる場所では、話し声や空調の音、物がぶつかる音など一般には気にならない音も耳が拾ってしまい、音の波が体に押し寄せてくるような圧迫感で、いつも耳を押さえていたそうです。

幼い子どもが両耳を押さえる姿を目にするのは耐えがたく、敦子さんは音に生活が支配されているように感じていました。「とにかく大変そうで。どうしたら少しでも楽に生活させてあげられるのか対処方法を見つけようと必死だった」といいます。

ところが智哉君が5歳の時、電車のアナウンスや発車メロディーなどお気に入りの音をデジタルオーディオに録りためてプレゼントすると、その日からデジタルオーディオの音を聴きながらであれば外を散歩できるようになったといいます。

また、イヤーマフが音を和らげるのに有効なこともインターネットで知り、今はスーパーやレストランなど騒がしい場所に入る前には、あらかじめイヤーマフをつけて入店し、徐々に耳を音に慣らしてからイヤーマフをとるようにしているということでした。

「勘違いはしょっちゅう」「お母さんに申し訳ない」

実際、イヤーマフをしていると、音楽を聴いていると“勘違いされることはしょっちゅう”だそうです。敦子さんは次のように話してくれました。

「小さいうちから音楽を聴かせると耳が悪くなるわよ」と注意されたことも多々ありました。心の中では「そうじゃないんだけどな」と思いながらも、まあ、勘違いされても当然か、と自分を納得させていました。

ただ、バスなどで赤ちゃんが泣いている際、「お母さんを嫌な気分させたら申し訳ない」と感じながらも、体が硬直してきている智哉君にイヤーマフをそっとかぶせる時は、なんとも言えない悲しい気持ちになる。

少しでも、少しでも、少しでも

私もバスの中などで、大きなヘッドホン（今思えばイヤーマフ）つけた子どもを見たことがあり、なんでつけているのかな？ぐらいにしか思っていませんでした。

冒頭の投稿を知るまでは、聴覚過敏も知りませんでした。その症状のつらさも、周囲に誤解されるつらさも、なんとも言えない悲しい気持ちになることも知りませんでした。まだイヤーマフがない時代、聴覚過敏の方たちはどのように過ごしていたのかとも思いました。つらさが少しでも和らぐために、誤解が少しでも解けるために、悲しい気持ちが少しでもなくなるために、聴覚過敏と闘っている人がいることを少しでも多くの人に伝えていきたい、この記事がその一助に、つらさを和らげる力になればと思います。

韓国外相「北朝鮮がピョンチャンパラ参加を表明」



それぞれ開催されます。

これについて、韓国のカン・ギョンファ外相は12日、国会で、「北がパラリンピックに参加を申請する書類をパラリンピック委員会に提出した」と述べ、北朝鮮が核・ミサイル開発をめぐって国際的な孤立を深める中、ピョンチャンパラリンピックに参加する意向を表

NHKニュース 2017年10月12日

韓国のカン・ギョンファ（康京和）外相は、北朝鮮が核・ミサイル開発をめぐって国際的な孤立を深める中、来年3月に韓国で開かれるピョンチャンパラリンピックに参加する意向を表明したことを明らかにしました。

韓国北東部カンウォン（江原）道のピョンチャン（平昌）では、来年2月に韓国で初めての冬のオリンピックが、続いて3月にはパラリンピックが、そ

明したことを明らかにしました。

ただ、北朝鮮は依然として、ピョンチャンオリンピックへの参加の意思は示していません。

韓国政府は、I O C＝国際オリンピック委員会を通じて北朝鮮に対し、オリンピックへの参加を繰り返し呼びかけていて、カン外相は「北から選手や応援団など多くの人が参加することを願っている」と述べ、重ねて期待を示しました。

北朝鮮 障害者福祉重視をアピール

北朝鮮はこのところ、国際社会に対して、障害者福祉に力を入れていると盛んにアピールしています。

ことし5月には、国連人権理事会で障害者の権利を担当する特別報告者をピョンヤンに招き、養護施設などを案内したほか、政府高官や障害者団体の代表らと会談する機会を設け、「キム・ジョンウン（金正恩）朝鮮労働党委員長の人民重視の政治によって、障害者は差別なく暮らしている」と主張しました。

また、北朝鮮は、去年12月、障害者の尊厳と権利を保障する障害者権利条約を批准し、ことし6月にニューヨークの国連本部で開かれた締約国会議に外務省の高官を初めて出席させました。

核・ミサイル開発をめぐる国際的な孤立を深めている北朝鮮としては、ピョンチャンパラリンピックへの参加を表明することで、障害者福祉を重視する姿勢を印象づけるとともに、スポーツを通じた国際社会とのつながりを維持したいものと見られます。

生きていく原点を ドキュメンタリーもうろうをいきる



大阪日日新聞 2017年10月12日

「コミュニケーションの大切さを考えさせられます」と話す西原孝至監督＝大阪・十三の第七藝術劇場

耳が聞こえなくて目が見えない人のことを「盲ろう者」という。地域で支え合いながら暮らしている盲ろうの人たちを訪ねたドキュメンタリー映画「もうろうをいきる」（シグロ配給）が14日から、大阪・十三の第七藝術劇場で公開される。「生きていく原点を...」という西原孝至監督（34）に話を聞いた。

「もうろうをいきる」の一場面＝(C)2017 Siglo

西原監督は早大卒業後、映画美術

学校を修了しテレビのドキュメント製作会社に入社。ディレクターになってからフリーに転身。前作は学生団体SEALDsの活動を追った「わたしの自由について～SEALDs 2015～」で「不安を抱えながら手探りで新しい一歩を踏み出そうとしている人を追った」。

SEALDsの映画を見た映画製作会社のシグロが「盲ろう者のことを映画にして、多くの人に存在をアピールしたい」と西原監督に声をかけた。「山上徹二郎プロデューサーとは以前から面識があったが、紹介を受けて盲ろう者とお会いして、こんな世界があることを知った。全国各地で暮らすそれらの人を撮影することを通して、人はどう生きていくかという、答えのない問いを考え続けた」

映画には8人の盲ろう者が登場する。昨年の夏に行われた全国的な「盲ろう者大会」に参加してから今年の2月まで撮影を続けた。「一人で生きていけない人が、周囲の人とどうつながり、コミュニケーションをとるか。みんな障害の程度が違うし、一人一人形が違う。



その中に、人生の喜怒哀楽がそれぞれ詰まっている」

盲ろう者同士の夫婦、盲ろうの姉と健常者の妹らが共に生きている。「お互いに存在を認め合って、助け合いながら生きている。ほぼ笑ましい夫婦であり、妹は『姉の代わりはない』とその存在を尊ぶ。相模原市の重度障害者施設を襲った恐ろしい殺人事件は誰もがとても許せないと強く思うだろう...」

盲ろう者で初めて大学に進学し障害学やバリアフリー論研究の第一人者として障害者の福祉増進を目指す活動に取り組んでいる福島智さんは「意味ある人生にするには、広い意味での人の力が大切だと思う」と話す。西原監督は「多くの人と一緒に生きていく社会。つえを持っている人に目がいく社会になってほしい」と訴える。

15日午後1時50分からの上映後に西原監督と出演者の川空礼将さんがトークショーを行う。問い合わせは電話06(6302)2073、劇場。

発達障害理解し支援を

読売新聞 2017年10月12日

「早期発見が重要」

こどもの発達障害や知的障害について講義を行う宮教授(5日、富山大五福キャンパスで)

21日から3回にわたってこどもの健康問題の早期発見・対応方法を紹介する富山大学市民講座「子供の健康を守る」(読売新聞北陸支社共催)。28日の第2回「子供の成長・発達と健康」に登壇する同大人間発達科学部の宮一志教授(43)に、こどもの発達障害を巡る現状と課題を聞いた。

「学校や社会全体に知ってもらえないと、こどもたちが過大な要求をされてしまう」。今月5日、同大五福キャンパスで行われた講義で、宮教授はこどもの知的障害や発達障害について学生たちにそう訴えた。

同大付属病院の小児科で診察にあたる宮教授によると、発達障害で受診に至るケースは大きく二つに分けられる。一つは、落ち着きがないなどの行動が気になり受診するケース。もう一つが、不登校や学校でのトラブルを抱えた小学校高学年以上のこどもが頭痛や腹痛などを訴えるケースで、ストレス性の体調不良の原因を調べた結果、発達障害と判明する例があるという。

発達障害は特性に個人差が大きく、軽度であれば家族が気付かないことも多い。宮教授は「周囲からの誤解や周囲に認められないことで、自信ややる気を失うこともある。だが、早期に発見できれば、学校や親の支援でその子のペースで能力を伸ばすことができる」と指摘する。

文部科学省によると、通常学級に在籍しながら別室で特別の指導を受ける発達障害などを持つこどもの数は、2006年度に全国の公立小中学校で約4万1000人だったが、16年度には約9万8000人に増えた。同省特別支援教育課の担当者は「発達障害に対する社会的な認知度が高まっているからではないか」と分析する。

宮教授は、「早期発見し、個人の特性に合った支援をしていくことが重要だ」と呼びかけている。

講座は、いずれも土曜日の午後2時～4時。受講無料だが事前申し込みが必要。対象は高校生以上で、定員は毎回200人(先着順)。

希望者は、氏名、住所、郵便



◎2017富山大市民講座「子供の健康を守る」の内容

	テーマ	講師
第1回 10月21日	地域・学校・家庭連携による 小児期からの生活習慣病予防	関根 通和 教授
第2回 10月28日	長時間メディア利用の実態と対策	山田 正明 助教授
第3回 11月11日	発達障害の子供との関わり方の基本	宮 一志 教授
	思春期の心の発達と精神的不調 早期発見と早期対応	西山七美子 研究員
	子供の発熱と感染症への対応	小沢 晴佳 診療助手
	食物アレルギーと アトピー性皮膚炎への対応	伊藤 晴典 助教授

番号、電話番号、受講講座を記載し、ファクス（076・445・6033）または電子メール(shimin@adm.u-toyama.ac.jp)で申し込む。

各回の申し込み締め切りは、第2回が13日、第3回は27日。問い合わせは富山大地域連携推進機構（076・445・6519）へ。

認知症予防 カフェ開設 話して、遊んで、楽しんで 中日新聞 2017年10月12日

保育園児と「じゃんけんペタンコ」に取り組む参加者＝七尾市田鶴浜町で

田鶴浜 園児飛び入り 地域ぐるみで活動

地域の高齢者が集い、コーヒーやお菓子を味わいながら、談笑することで認知症を予防するカフェが十一日、七尾市田鶴浜地区で始まった。健康福祉プラザさつき苑（田鶴浜町）の「さつきカフェ」では、住民や地区社協などの五十人が参加し、ゲームを楽しんだ。今後、地区内三カ所で、それぞれ月一回開かれる。（松村真一郎）



「グー」「チョキ」「パー」が描かれた的に、同じ絵の布製円盤を投げ、勝つところに入るとポイントが得られる「じゃんけんペタンコ」に取り組んだ。思うように的に入らなかつたり、勘違いして負けてしまつたりする参加者もいたが、楽しんだ様子だった。

散歩の合間にカフェに立ち寄った田鶴浜保育園の園児二十六人も、飛び入りで参加。参加者たちの顔には、満面の笑みが広がった。同所の高城信子さん（74）は「楽しくて脳のトレーニングになる。家から出るいい機会です」と話した。

「団塊の世代」が七十五歳以上の後期高齢者になり、介護・医療費の急増が懸念される「二〇二五年問題」を前に、認知症について地域で考える場を設けようと、福祉分野について知識を持つ地区生活・介護支援サポーター会と地区社協が運営する。

福祉系の学科がある地元の田鶴浜高校の生徒も活動に携わり、地域ぐるみで認知症の予防に取り組む。

藤沢和吉地区社協会長は、地区での高齢化率は四割ほどになるといい、「認知症にならないため、家から出て話ができる場にしたい」と語った。金ヶ崎公民館の「ねむの木カフェ」は十八日、相馬公民館の「ひまわりカフェ」は十一月一日に開かれる。（問）田鶴浜地区社会福祉協議会0767（68）3336

DV 障害女性の相談急増 健常者比8倍ペース 家庭で立場弱く

毎日新聞 2017年10月12日

全国の配偶者暴力（DV）相談支援センターに寄せられる相談のうち、障害のある女性からの相談が、健常者の女性の8倍のペースで増加していることが分かった。「世話をしてもらっているのだから」と、家庭内で圧倒的に弱い立場に置かれやすい傾向があるという。【上東麻子】

内閣府男女共同参画局の調査結果をDPI（障害者インターナショナル）女性障害者ネットワークが分析した。2016年度の健常者女性の相談は13年度と比べ4・8%増え9万7787件、一方、障害がある女性からの相談は37・4%増え6929件だった。

月刊情報誌「太陽の子」、隔月本人新聞「青空新聞」、社内誌「つなぐちゃんベクトル」、ネット情報「たまにブログ」も
大阪市天王寺区生玉前町5-33 社会福祉法人大阪手をつなぐ育成会 社会政策研究所発行

